2006 年度

総合格闘技の世界における「スポーツの変容」についての考察
―男性・女性格闘技の映像を用いた実験を通して―

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
清水　康太郎

本研究では、従来のスポーツとジェンダー研究が行ってきたように、男性中心のスポーツ世界において女性の進出という現象には、スポーツ参加の男女平等を達成させるよりもむしろ、今まで以上にスポーツの男性優位を強化し、社会においてのジェンダー意識の再生産に加担してしまう恐れがあると考える。またそのようなスポーツが持つジェンダーの生産・再生産機能を明確にすると同時に、スポーツにおけるジェンダー問題を乗り越えるための「スポーツの変容」に目を向けていく事も本研究では行う。

そこで本研究においては、スポーツの中でも特に我々の「男らしさ」意識と密接に結び付いていると考えられる格闘技を研究対象として、実験的な調査研究を行っていく。また格闘技と言っても世の中には多様な格闘技が存在するが、本研究では男女の参加の平等と女性による格闘技実践が比較的最近行われるようになってきた「総合格闘技」に絞って研究を進める。研究の概要としては、被験者に対して男性・女性両方の総合格闘技の映像を視聴させ、視聴前後の性差観得点を得るために質問紙を実施した。また、それぞれの映像視聴後にはその格闘技に対するイメージを知るための質問紙も実施した。実験の仮説は、仮説 1「格闘技の映像を実際に視聴する事で性差観が強化・再生産される」、仮説 2「性差観、視聴頻度が高まるにつれて男性格闘技に対するイメージは肯定的に、女性格闘技に対するイメージは否定的になる」、仮説 3「女性よりも男性の方が男性格闘技に対するイメージは肯定的に、女性格闘技に対するイメージは否定的になる」の 3 つであった。

実験の結果から、男性と女性による格闘技を比較するような形で視聴させる事によって個人の性差観を高め、さらに性差観が高まる事によって男性格闘技に対しては肯定的なイメージを抱き、女性格闘技には否定的なイメージを抱くようになるという一連の流れを確認できた。これは男性・女性それぞれのスポーツを視聴する事で男女差が明確になり、メディアスポーツによる男・女の構築について、それを支持する結果となった。さらに本研究では、総合格闘技がその中に持っている階層的な世界に注目し、男性中心に行われてきた従来の大会システムに女性の試合を組み込んでいく事で、男性格闘技と女性格闘技を別々の舞台ではなく同じ舞台で見せる事が総合格闘技における「スポーツの変容」の視点となり得ると考察する。また総合格闘技で構築されている階層的な世界というのは、社会における男性中心主義を支えてきたものと共通する世界であると考え、総合格闘技において男女の平等が実現される事が社会へと還元される可能性があると結論付ける。